

特別報告およびシンポジウム

司会 鶴岡賀雄

2008年度の大会においては、特別報告二件とシンポジウムが行われたが、これらは密接な関連をもつものとして企画された。したがって、両企画の趣旨説明および報告は、特別報告、シンポジウム双方の司会を務めた鶴岡が一括して記させていただく。まず、特別報告、シンポジウムを通じて、報告者、提題者に共通の問題関心の所在を示しておきたい。

趣 旨

—昨年（2006年）のシンポジウム「中世から近世へ——知のあり方の変容？——」においては、三人の提題者（坂部恵、伊藤博明、加藤和哉）がそれぞれの視点から、何らかの仕方で「中世から近世にかけての知のあり方の変容」がなされたことを、あるいはそれを前提に論じているが、その際、それぞれの「知」が産出される場としての制度の問題が陰に陽に意識されていたように思われる。それは当面、西欧中世において成立した「大学」を基準に考えられていた。大学こそはアキナスら盛期スコラ学の展開の場であったし、ルネサンス知識人達の活動の場も相当程度「大学」だったという。しかるに、近世初期の重要な哲学者たちは、大学人でないところに特徴があった。それに対して、十九世紀以降、現代に直結する学問ないし哲学の場は、総じて「大学」であり続けている。現在のわれわれも、「大学」という場を学問の主たる場としており、それを半ば当然のこととしているところがある。

だが、広義の中世哲学、中世思想が産出され、また生きられていた場が、いわゆる大学に限られるわけではないこと、さらにその大学も十九世紀以降のそれと同様同質のものではなかったことは明らかである。大学という制度がなかった場所でも、哲学、思想と呼びうるものは生まれ、営まれていた。この当然の事実を、今回の特別報告、シンポジウムを通じてあらためて自覚化したい。それによって、哲学・思想の営みがなされる「場」が、現代のそれも含めて、当の哲学・思想の内実自体にたいしてもつ意義を広

く思考の対象としたい。

こうした問題関心のもとに、二つの特別報告およびシンポジウム提題では、哲学ないし思想——これを今回の企画では「学知」と呼んでみた——が探求され産出される際のある意味で外的な条件である制度の問題に当面の視線を向ける。それは、当の学知自体のあり方にとって、どのような関わりを有するか。

まず、制度は、その制度内でなされる学知の探求および産出の「方法」を措定ないし指定するだろう。それはさらに、産出される学知の「表現形態」ないし「形式」の許容範囲も決定していくと思われる。そうして定められた方法や形式は、それに則って追求され産出される学知自体の性格にも、さまざまな仕方で反映していることだろう。またそもそも、学知形成の場たる制度は、それぞれの経済的基盤を得て、何らかの社会的、政治的、宗教ないし教会的、等の「目的」——学知が「自己目的」である場合も含めて——のもとに創設されたはずであり、その制度的目的の所在が、またそこに所属する人々の根本的目的意識が、産出される学知の根本性格を規定しているはずでもあろう。

これらが、中世にあっては、近現代の大学や学会といった制度のそれと、大きく異なることは言うまでもない。いわゆる古代哲学の場とも異なるどころがあるだろう。「中世哲学」ということを、便宜的歴史区分としてではなく、ある特有の哲学的思索と実践の場に根づいたものとして捉えようとするならば、「制度と学知」との本質的とも見える関わりの諸相を明確化することは、重要な意義を有すると思われる。

構 成

こうした問題関心のもとに、今回の特別報告およびシンポジウムでは、時代的には古代後期から中世にかけて、またキリスト教世界の外にまで視野を拡げて、広く問題を展望してみようとした。二つの特別報告とシンポジウムの構成は以下のものであった。

大会第一日に、秋山学による特別報告、「ビザンティン世界における「知」の共同体的構造——写本伝承活動と宇宙論的典礼を基点に——」と、矢内義顕「11-12世紀における二つの学校——ベックとラン——」が続けて行われた。秋山報告への指定質問は矢内が、矢内の報告への指定質問は秋山が、それぞれ行なった。これらは大会二日目のシンポジウムと密接な関

連をもち、ある意味でシンポジウム提題の一部をなすものと位置づけられている。

前日の特別報告を受けて、シンポジウム本体では、以下の二つの提題がなされた。西欧世界・ビザンティン世界の地理的外部に隣接して、これらと並行しつつ学知の探求と産出をなしたシリア教会やイスラーム世界の状況についての、高橋英海による「アレクサンドリアからバグダードへ——学知の経由地とイスラーム世界での学知の受容におけるその影響——」、そして、パリ大学におけるトマス・アクィナスのドミニコ会士としての活動を巡る山本芳久による「盛期スコラ学における制度と学知——トマス『神学大全』の制度論的背景についての一考察——」である。シンポジウムには、両提題者とともに、特別発表者である矢内、秋山も登壇し、相互質問と討論、またフロアからの質疑が行われた。

ま と め

制度と学知の関わりに焦点を据えた研究が、中世哲学を産出していった諸制度についての歴史的知識を増やすことのみを目指すものではないことは、上に略述したとおりである。特別報告、シンポジウムにおける相互質問や討論を聞いて、司会者として気づかされた大きな論点を、「まとめ」として記させていただく。

まず、広義の制度は学知生成のいわば外的条件ではあるが、それは学知の内容を一方的に規定するものではない。制度が学知を規定するとともに、その制度内で生成される学知が、その制度的制約を何らか打ち破って、新たな学知のかたちを生み、さらにそれを支える新たな制度が生み出されていく、という動態もあるだろう。山本報告で扱われたトマス・アクィナスの活動には、そうした事態がはっきり見てとれるようである。さらに言えば、制度と学知のこの双方向運動自体を見ることで、学知を超えつつ包む叡智とも呼ぶべきもののあり方がほの見えてくるかもしれない。

また、学知生成の外的条件の自覚は、当の学知をいわば歴史のコンテクストの中に置き入れること、いわゆる歴史化することでもある。ラテン中世においても、「大学」という制度が確立する以前から、いくつもの学知の場所があった（矢内報告）。シリア教会やイスラーム世界では、さらに異質の知的・宗教的環境の中で、学知の探求や産出が為されていた（高橋提題）。こうした歴史的状況についての精細な知見は、それらと現在のわれわれが属している「大学」制度との差異を強く自覚させてくれる。これ

は、あるいみで学知生成基盤の多様性の自覚であり、自らのそれを含むあらゆる制度の相対視をもたらすだろう。しかるべくなされた自己相対化は、自らの営みのかならずしも気づかれていない諸前提を明るみに出してくれる効果がある。とともに、自らの置かれている状況や制度とは大きく異った学知探求のかたちがありうることに気づかせてくれる。このことは、自己認識の深化をもたらすとともに、自己と他者に共有の問題の存立地平を探り出す思索をも喚起するだろう。ビザンティン世界での教会典礼の宇宙論的構造を論じた秋山報告への意見の中に、哲学的論述に結実する *logos* による *sophia* の探求ないし表現（著作）だけではなく、典礼という *praxis* による *sophia* の探求ないし表現もあることを指摘する発言があった（柴田有氏）。大学の講義と教会の典礼という形態の差異は大きいし、それを生む制度のあり方も大いに異なる。しかし *sophia* 探求のこの二つの姿は、協和し、どこかで収斂するものとも考えることもできるだろう。

ビザンティン世界における「知」の共同体の構造

——写本伝承活動と宇宙論的典礼を基点に——

秋 山 学

I

ビザンティンにおける「ルネサンス」の時期と呼ばれるマケドニア朝時代は、867年に即位したバシレイオスI世(在位867-886)によって創始される。彼は、726年に始まり787年に一旦終息し、814年に再燃し843年に再終息した聖画像破壊運動後の時期を回復に向かわせ、ビザンティン帝国の国力を充実させた。そして「マケドニア朝ルネサンス」と呼ばれる文化的開花の時期は、その子である賢人皇帝レオVI世(在位886-912)と、孫であるコンスタンティノスVII世ポルフィロゲネトス(在位945-959)の2代において開花し、とりわけポルフィロゲネトスの時期に古典復興の機運は高まりを見せる。彼は、学問全般に強い関心を示して百科全書主義的傾向を見せ、古典著作家の諸作品を集め筆写させた。実際、現存する古典ギリ